

資質・能力を育てる教育評価に関する研究 －OPPA論を中心にして－

A Study Concerning Educational Assessment for Students' Attributes and Abilities:
Mainly Focused on the OPPA Theory

堀 哲 夫*
HORI Tetsuo

要約：今回改定された新しい学習指導要領では、「資質・能力の育成」が重視されている。これまで教育評価を通して資質・能力を育てるという視点は全くなかったと言える。本稿は、こうした資質・能力を育てる評価観の欠如を始めとして、教育評価の課題を四点にわたってまず明確にした。次に、どうすれば教育評価において資質・能力を育てることができるか、その具体的方法を学習による変容の外化と可視化、他三点にわたり提案した。その中で、資質・能力を育てる評価の一方法としてOPPA（One Page Portfolio Assessment）論をあげ、その骨格を説明し、資質・能力の育成のためには、学習者用と教師用二つのOPPシートの重要性和関連性について言及した。さらに、OPPAはなぜ「指導の機能」を持つのか、その主たる要因はOPPAにおける学習や指導の機能を持つ評価観にあることを中心にして五点から検討を行った。

キーワード：資質・能力，OPPA論，指導と評価の一体化，学習と評価の一体化，指導の機能をもつ評価

はじめに

本研究は、教育評価の課題を検討し、今回改訂された学習指導要領で重視されている資質・能力を育成するための評価はどのようにしたらよいのかを提案することにある。とりわけ、資質・能力を育成する具体的一方法であるOPPA（One Page Portfolio Assessment）論¹⁾を中心にして検討する。OPPA論は、評価論として取り上げられることが多い²⁾。しかし、OPPA論は、各教科や道徳、運動会、朝読、インターンシップ等々の教育実践を始めとして、教育目的・目標、教育内容、教育方法、カリキュラム論、学力論等々の教育実践研究の検証などに活用できる汎用性を持っている³⁾。

OPPA論は、本来、教育論として議論されるべきであると考えられるのだが、その検討は別の機会に譲ることにして、今回は改定された学習指導要領で重視されている資質・能力を育てる教育評価の一方法としてOPPA論を取り上げる⁴⁾。

I 教育評価の課題：評価の何が問題か

学校教育の教育実践において、教育評価の究極目標は、これからの社会を生きていく上で必要とされる資質・能力を身に付けているかどうか、またそれを育成するための働きかけが適切であるかどうかを判断し、それを機能させることであると考えられる。これまで、教育評価は、とりわけ学習者にとって重要な意味をもっているにもかかわらず、必ずしも適切に扱われてこなかったように思われる。なぜか。その主な課題を以下四点あげておく⁵⁾。しかし、課題を明確にするだけではな

* 理事・副学長、教育国際化推進機構長

く、解決することに意味があるので、それに関しても後半部分で具体的な提案を行いたい。

1. 教育目的・目標と教育評価の位置づけ：教育に関する領域の重層性

第一は、教育の世界では、教育目的・目標から始まって、目的・目標が内容を、内容が方法を規定しというように考えられており、教育評価が最後に位置づけられてきたことである。たとえば目的・目標に謳われていたとしても、それが達成されたかどうか確認されないことが起こっていたのである。つまり、教育目的・目標と教育評価は、本来、対にして議論し、かつ取り扱われるべきである。

これは、たとえば授業を行うときに使う学習指導案に書かれている目標に関しても言える。学習指導案には、必ず指導目標（学習目標と呼ばれることもある）と観点別評価が書かれているが、後者のみが評価され、前者は多くの場合、冒頭に書かれているだけとなっていることが多く、このことに関して話題になることはほとんどない。

2. 教育評価研究の後れ：「指導と評価の一体化」と「学習と評価の一体化」

次に、教育評価に関する研究がなかなか進まなかったことがあげられる⁶⁾。つまり、教育目的・目標は理論として、教育評価は実践における問題として扱われ、理論的な面から研究が深められることが少なかった。そのため、教育実践までも視野に入れて教育評価が議論されることはあまりなかった。

この点に関しては、次のようなことから明らかである。上であげた指導目標や学習目標の達成に関していうと、学習者の学習過程や履歴を中心にした「指導と評価の一体化」や形成的評価の重要性はたとえ説かれていたとしても、その具体的な研究は、ほとんど深められてきていない現実がある。それゆえ、学習者一人ひとりの実態をどう具体的に捉え、確認するのかという視点が欠如していた。このことは、後に議論する「指導の機能を持った評価観」と深く関わっている⁷⁾。

評価研究と関わる課題の中で、とりわけ重要であると考えられるのは、「指導と評価の一体化」という教師目線からの研究が重視されてきており、学習者の立場からの「学習と評価の一体化」がほとんど行われてこなかったことである。その結果、評価によって資質・能力を育成することは、とうていでき得なかった。これを端的に示しているのは、学習者の自己評価に関わる研究がほとんど行われていない現状からも明らかであろう。言うまでもなく、自己評価は学習者のメタ認知能力を育成するために、とりわけ重要である。それは、メタ認知の能力は、資質・能力の中でも最上位に位置づけることができるからである。

したがって、今後は、実質を伴った「指導と評価の一体化」、学習者による「学習と評価の一体化」、言い換えると学習者のメタ認知能力を育成する自己評価に関する研究が実施され、深められる必要がある。「指導と評価の一体化」と「学習と評価の一体化」は、評価と指導や学習を切り離して考えない（assessment as teaching and learning）という意味なので、前項で述べた点と深く関わっている⁸⁾。このように、理想として語ることは簡単であるが、教育実践においてどう具現化するかは、現実の教育の重層性と深く関わっておりきわめて難しい。

3. 資質・能力を育てる評価観の欠如：「指導の機能を持った評価観」の重要性

第三に、資質・能力を育てるための教育評価が行われてこなかったことである。教育において重要なことは繰り返し問い、何がどうなっているのか確認して、不適切な状態を改善するための働きかけを絶えず行う必要がある。そこでは、どこまでが指導でどこからが評価かという区別は付けにくいし、それを行おうとすると評価が後回しになってしまいがちになる。それゆえ、これまでも言われてきた「指導と評価の一体化」が難しかったのである。

それを克服するためには、「資質・能力を育てる評価」が求められている。つまり、「指導の機能

をもつ評価観⁹⁾がきわめて重要となる。現在、このような視点から行われている評価は、ほとんどない。

上述の第二と三は、後に議論する「指導の機能を持った評価観」と深く関わっている。

4. 「理解」の評価の欠如：「知識」の結合様態の把握の重要性

第四に、学習や授業においてほとんどの場合「知識・理解」の観点から評価が行われてきたが、実際は「知識」だけであって「理解」の評価が行われてこなかったことである。本来は、「理解」という観点の中で「知識」の結合様態を把握するべきところを、「知識・理解」と一括りにされているので、単なる「知識」だけを確認して「理解」も評価したことにしてきたからである¹⁰⁾。この検討を踏まえると、今回改定された学習指導要領では、「知識・技能」となり相変わらず「知識」が残されたが、「理解・技能」とした方がよいと考えられる。なぜ、「理解」の欠如が問題になるかと言えば、それが「知識」よりも資質・能力の育成と深く関わっているからである。

たとえば、「考える」ということを考えてみても、物事を考えるためには対象となることに関する知識が必要である。それだけでは不十分で、それらの知識がどのように結びついているのか、それが適切か否かを判断する必要がある。このように検討してみると、資質・能力と「理解」は深く関わっていて切り離して考えられないことがわかるだろう。

II 教育評価において資質・能力を育てる視点の重視：評価と関わってどう考えたらよいか

では、以上の課題を踏まえてこれからの教育評価について具体的に検討してみたい。

1. 教育評価論と目的・目標論の関係

第一は、やや極端かもしれないが教育評価論が教育目的・目標論を包括するように重層的構造が理解できるように位置づけることである（図2参照）。そのように位置づけるのがやり過ぎであれば、せめて同列に置くべきであると考えられる。具体的に図示することは難しいのだが、イメージ的には図1がこれまで、図2がこれからの評価の扱いと考える必要があるだろう¹¹⁾。

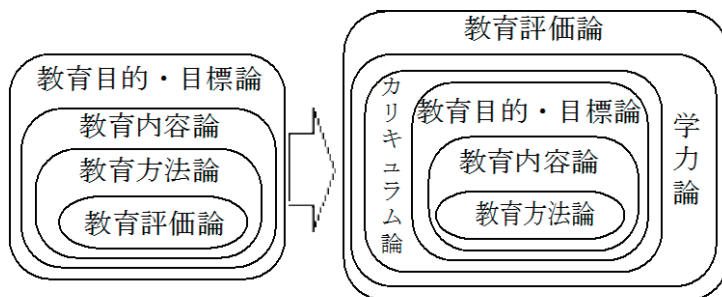


図1 これまでの評価

図2 これからの評価

最近の動向を見ると、ウィギンズの「逆向き設計論」¹¹⁾を待つまでもなく、目的・目標の設計と評価を同時に考える重要性が説かれている。つまり、目的・目標は単なる理想として述べられるのではなく達成されてこそ意味があるという考え方である。教育評価の課題のところでも指摘したように、「指導と評価の一体

化」が、たとえ言われたとしても、実践が追いついていないし、ましてや学習と評価を一体として考える「学習と評価の一体化」は、ほんの少し言われる程度になってきているのに過ぎない。

なぜ、このようなことが強調されるのかと言えば、現行学習指導要領における目標としての「生きる力」とその評価を考えてみれば明らかであろう。「生きる力」の必要性和重要性は誰もが信じて疑わない。しかし、その実態の把握や評価が、教育実践においていつどこでどのように行われているのか、誰も答えることはできない現実がある。

本稿で主張し提案したいのは、うまく説明できないのだが、教育実践を規定する要素、たとえばここで議論している目的・目標、方法、内容、方法、学力、評価など、それぞれ関係の深い要素が一体として扱われるのであれば、適切に機能しないということである。つまり、たとえば学力一つとっても、それが目的・目標、内容、方法、評価などと密接に関わっており、切り離して考えることは難しい。ましてや、その獲得や形成の話ともなると学習者や実際の学習や授業と関わらざるを得ない。

しかし、複雑に関わり合い絡み合っている教育現象の総てを検討の対象にすることは現実問題として不可能であるので、重要な要素間の一体化を中心にしていくことになる。

2. 教育評価論とカリキュラム論・学力論

第二は、これまで教育は目的・目標、内容、方法、評価などという枠組みで考えればよかったのが、最近では学力やカリキュラムをどう位置づけたらよいかという新たな課題が生起してきていることである。そこで、異論があることは承知の上で、図2のような位置づけを提案してみたい。真ん中に目的・目標、内容、方法があり、それをカリキュラムが支え、カリキュラムを学力が、学力を評価が支えるという枠組みである。

このように考えてみると、カリキュラムがただ内容を中心にして考えれば良いのではないこと、どのような学力をどう評価したらよいのかを考えざるを得ないこと、つまり学習者一人ひとりの実態に着目せざるを得ないこと、等々が明確になってくる。要するに、図1にカリキュラム論や学力論を位置づけしようとするとかなりやっかいなことになってくるのであるが、学習や授業の場面では、切り離して考えることは困難なのである。

こうした背景には、これまでのようにどちらかと言えば教育者の想定する鋳型に学習者をはめるのではなく、一人ひとりに合わせて仕立てられるテーラーメイド (tailor-made) の学習者の学びの姿を想定した教育観が求められているといえよう。

3. 学習者の認識論や学習科学の知見

第三は、教育評価を考えるに当たって最近の学習者の認識論や学習科学の知見などを取り入れて考える重要性である。上で述べたように、テーラーメイドの教育観に立てば、学習者の学習過程や認知過程に着目することが必然的に出てくる。教育の評価や学力に着目することは、すなわち学習者の学習による変容を外化、可視化することを意味している¹²⁾。その変容は、学習過程や認知過程をどう把握するかということでもある。

学習者の既存の知識や考えが、教師の授業による働きかけによりどのように変容していくのかに関する研究は、近年、学習者の学習過程や認知過程を外化し可視化することなどによって進められてきているが、まだまだ遅れていると言わざるを得ない。

ここで断っておきたいのは、認識論や学習科学の知見といっても、教育実践と結びついたものや日常的に利用できるものが求められているということを強調しておきたい。あえてこうしたことを強調するのは、たとえ教育現場で行なわれていたとしても、研究のために行われていて実践に使えるまで洗練されているものは、きわめて少ないと考えられるからである。日常的に、かつ普段の授業で利用できるという視点を追究したい。

4. 学習および授業履歴の外化と可視化

さらに、学習者の学習履歴のみならず、教師の授業履歴も明確にしておく必要がある。これまで授業の過程を把握できるようなものとしては学習指導案がある。しかし、学習指導案は一度作って

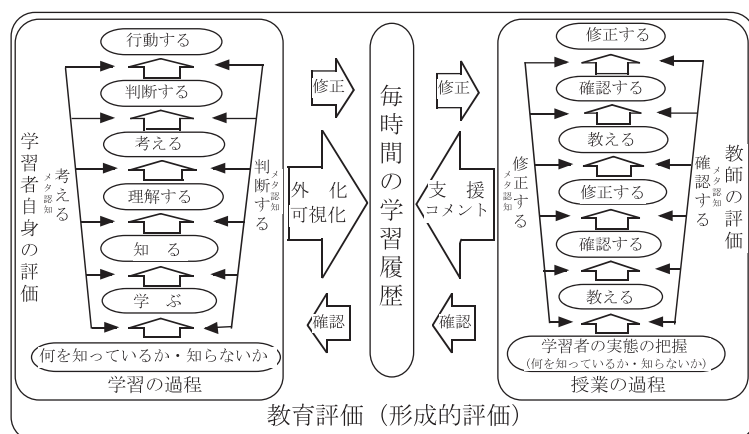


図3 形成的評価を可能にする学習履歴を介在した教育評価

支援やコメントを出す。このようなやり方をとれば、「指導と評価の一体化」および「学習と評価の一体化」を図ることが可能になると考えられる¹⁴⁾。

図4は図3をさらに学習前・中・後及び授業前・中・後として具体化したものである¹⁵⁾。ここでは、学習者の学習履歴に対応して教師の指導履歴も外化し可視化できるようになっている。具体的には、学習者の学習の過程が上段に示されており、その実態に合わせて授業の過程が展開されるという双方向性を導入し、まさに指導と評価の一体化を具現化した考え方である。学習前は学習者の既有的知識や考えを明らかにし、それに基づいて授業設計を行う。学習過程では学習履歴などを外化し可視化した内容や実態を基に教師が授業の修正を行う。ここでは、最初の授業計画の点検と修正が図られる。

学習後は、学習前と何がどう変わったのかを確認するために学習前と同じ問いなどで学びの変容を把握する。さらに、学習および授業の後に、学習者と教師双方が学習と授業の全体を振り返って、何がどう変わり、またなぜ変わったのかを自己評価する。このことにより、学習者は学ぶ意味を知り、教師は自分の教育観の変容を知ることにつながっていく。

ここで重要なのは、学習者の外化し可視化した学習履歴などを基にして授業の修正を図っていく点である。これは、言い換えると教師の教育観を変える手続きにつながっており、授業改善に必須の要件と考えられることである。これまで、筆者の知る限り誰も言及してこなかったが、授業改善は教師の教育観を変えることであり、それは教育評価によって可能になることを肝に銘じておくべきであろう。逆に言えば、教師の教育観を変えなければ授業改善は不可能である。

ここであげた図4を具体化し授業で使われるようにしたものについては、後に詳しく述べることにしたい。

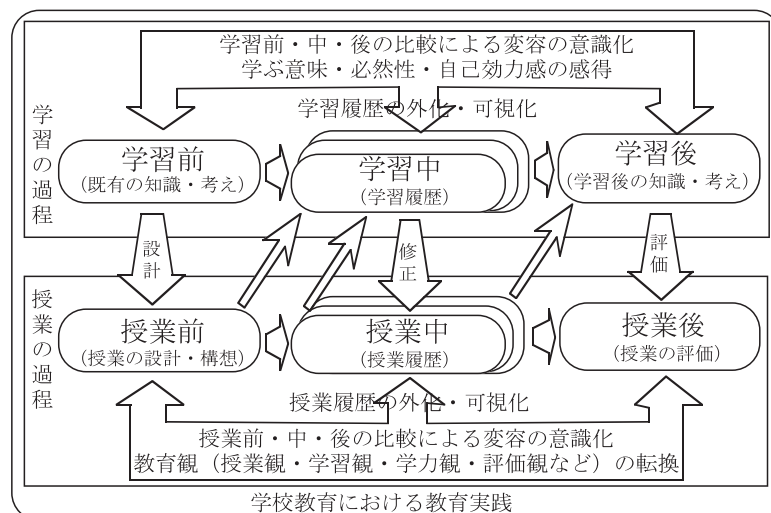


図4 教育実践における学習と授業の過程および変容の把握

Ⅲ 教育評価において資質・能力を育てる具体的方法：どうすれば可能か

これまで検討してきたような評価観、学習観、授業観を前提にすると実際の授業をどう行えばよいのだろうか。冒頭の課題のところでも述べたように、目的は目的、方法（授業）は方法、学習は学習、評価は評価などというように考えていたのでは、やはり評価が教育実践の最後に行われるということになってしまう。単元計画、学習や授業の目標が立てられ、それが行われる過程で評価計画が実行される必要がある。要するに指導と評価の一体化である。これが行われなければ「資質・能力を育てる評価」とはならない。これを実現するためには以下の三点が重要になってくる。

1. 学習による変容の外化と可視化

まず、学習により何が起きているのかを確認するために、学習過程や認知過程の結果を外化し可視化する必要がある。それは、授業の結果、何をどう学習者が捉えているのか学習履歴として明確にし、さらにそれを見て教師が授業を修正、改善していくことができるからである（図4参照）。また、学習者自身も学習履歴を学習前・中・後を振り返り、何がどのように変容したのかを具体的内容を通して可視化できるからである。

これまで、このように学習の成果を外化し可視化し、それに基づいて授業が展開されることは、ほとんど行われてこなかった。たとえ行われていたとしても、それぞれが切り離された形で行われることが多かったので、資質・能力の育成などに適切に機能しないことが多かった。

では、学習による変容の外化と可視化はどうすれば可能になるのか、それがなぜ資質・能力の育成につながるのか、具体的に検討してみよう。

2. 学習履歴を活用した資質・能力の育成

上記の考えを反映させ、実用化され具体的に提案されてきているものはほとんど見当たらない。

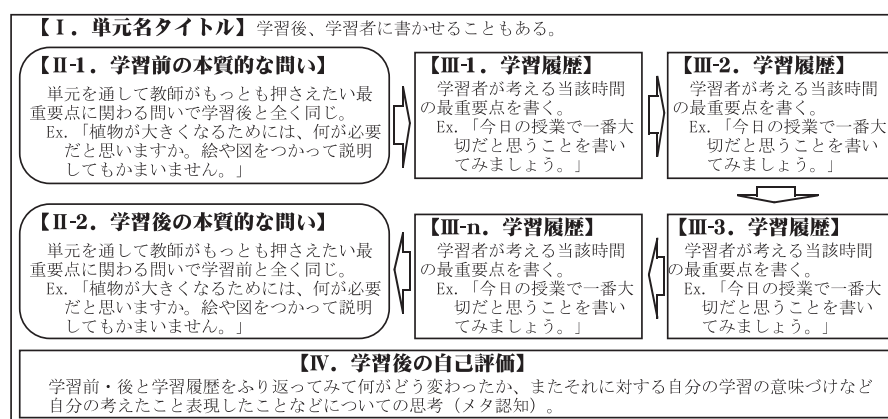


図5 学習者用OPPシートの構成要素と要点

そこで、あくまで一事例に過ぎないのだが、実際の授業で活用できるように考案されたOPP (One Page Portfolio) シートを紹介したい（図5参照）。ここでは、紙数の関係から詳細は割愛するが、このシートはOPPA (One Page Portfolio Assessment) 論の中で用いられているものである¹⁵⁾。

図5は、実際の授業で用いる学習者用のOPPシートの骨子である。評価を通して学習者用の資質・能力を高めるために以下の三点を重視している。

第一は、単元を貫く「本質的な問い」を学習前・後に同一のものとして設定している。これは、単元の学習による変容を比較して意識化し、学ぶ意味を自覚させるためである。

第二は、毎時間の学習履歴として「授業の最も大切だったこと」を学習者に考えさせ、何を書くか判断し、表現させる「思考力・判断力・表現力」を育成する働きかけである。

第三は、学習全体を振り返り、何がどう変わりそれについてどう思っているか自己評価させ、メタ認知の能力を育成する働きかけである。第一と二には、当然のことながら学習内容に関わる「知識・技能」の評価も含まれている。

3. 教師の指導履歴の外化と可視化による指導と評価の一体化

学習者の学習履歴と対応して教師の指導履歴も明確にしておくといよい。この理由は、学習者の実態に応じて授業の修正や改善が、リアルタイムと言わないまでも、授業の進行に合わせて可能になるからである（図6参照）。これまで、学習者の学習状況を外化し可視化してその実態を確認することは、ほとんど行われてこなかった。とりわけ、資質・能力に関しては、その傾向が強かった。

もっぱら、教師の経験と勘やコツに頼っていた。そのため、たとえ教師の思惑と学習者の間にズレが起こっていたとしても気づくことなく処理されてきた。医学の世界で行われている患者の実態をデータで知るとまできなくとも、教育で

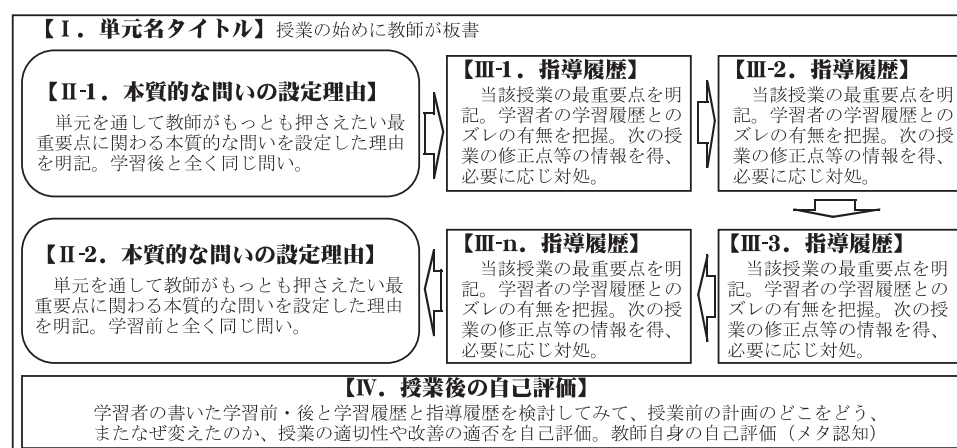


図6 教師用OPPシートの構成要素と要点

も、可能な限り学習者の実態把握に努める必要がある。

図6は、図5の学習履歴と対応している（図3も併せて参照のこと）¹⁷⁾。このシートは、単元の「本質的な問い設定の理由」、毎時間の学習履歴に何を書いてほしいかという指導者の意図および学習履歴から判断した授業の反省点と次時への修正点などを書く「指導履歴」、授業全体を振り返ってその適切性や改善などを自覚する「授業後の自己評価」から構成されている。

教師用OPPシートは、学習者用のOPPシートと一緒に作成し、学習者が外化し可視化した内容を基に授業設計を行い、授業の修正、改善に用いることができる。これまで、授業の設計や計画には学習指導案を作成してきた。しかし、学習指導案には、教師が多く時間をかけ相当苦心して作ったにも関わらず、一度作成して実行し出すとほとんど修正が利かない、授業過程において学習者のリアルな実態に合わせて改善が難しい、等々の問題点があった。

これからの教育現場で求められる評価は、可能な限り簡便かつ学習者と教師の双方向性を確認でき、さらに指導の機能を持ったものであると考えられる。

IV OPPAにおける学習や指導の機能を持つ評価観：OPPAはなぜ「指導の機能」を持つか

OPPAは、学習者用および教師用のOPPシートを用いて学習や授業を行うことは理解できたとしても、それがなぜ学習や指導の機能を持つ評価といえるのか、さらにそれがなぜ資質・能力を育成することにつながっているのであろうか。

こうした内容を検討する前に、「指導の機能を持つ評価」という表現は、これまで内外の文献の中でほとんど見当たらないので、まずその条件を明確にしつつ意味についても検討しておきたい。

1. 「指導の機能を持つ評価」の条件

「指導の機能を持つ評価」の条件として以下の五点をあげることができる。

(1) 学習者の実態を把握できること

どんな評価であっても、評価であれば学習者の実態を把握できるということは当然の条件である。したがって、このことについては取り立てて説明する必要は無いと考えられるが、以下の三点を指摘しておきたい。

一つは、学習者の実態といっても学習内容をただ記憶した実態を知るのではないということである。とりわけ、OPPシートにより学習前の実態を「本質的な問い」により調べることは、他には見られないことといえる。すでに述べたように、「本質的な問い」は単元などを通して最も理解しておいてほしいことやこれだけは伝えたいということを問にして確認しようとしている。それを学習前と後に行うことにより学びによる変容を把握したいからである。これまで、このようにして学習者の変容を知ることは、行われてきていない。

二つめは、学習履歴として「授業の一番大切なこと」を書かせることである。ふつうの評価では、その日に学んだ内容をそのまま問いにする、たとえば「直列回路について書きなさい。」のようにしている。このような問いは、学習した内容そのもの、言い換えると一番近いところから聞いていると言える。しかし、OPPシートの学習履歴における問いは、それと異なり学習した内容から一番遠いところから聞いている。そのほうが学習者自身の真の実態を知ることができると考えているからである。

三つめは、可視化した学習全体を振り返って自己評価させることである。このとき、具体的内容を伴って学習による変容について評価しようとしていることである。自己評価に関しても、これまでは具体的な内容を伴って可視的に行われてこなかった。そのため、自己評価能力の実態を把握することも、それを育成するための具体的な方法もわからなかった現実がある。

上記三点を一枚の用紙の中で学習の実態として把握しようとしている評価はこれまでなかった。

(2) 把握した実態に個別的かつ具体的な働きかけができること

学習者の実態を把握できたとしても、個別にしかも具体的に働きかけ、学習結果を修正したり改善したりすることは、かなり難しい。ふつうの評価では、個別にその実態を把握することができたとしても、一人ひとりに具体的に働きかけを行うことが難しい。その点、OPPシートを用いれば、その時点までの学習の成果と教師の働きかけが一人ひとりの実態に応じて可能になる。こうしたことができなければ、評価に指導の機能を持たせることはできない。

(3) 学習者および教師が改善した内容を可視的かつ形成的に把握できること

学習者及び教師双方が、それぞれ学習や授業の過程において修正、改善した内容を可視的かつ形成的に把握することも、ふつうの評価ではかなり難しい。多くの場合、学習や授業の成果を各過程において確認することすら難しく、ましてや修正や改善はさらに難しい。これは、図3および4で検討した学習と授業の相互作用が可能になる双方向性という前提があるからである。評価を指導に生かすとか指導の機能を持つ評価という視点は、こういう前提があって始めて可能になるのである。

(4) 具体的かつ可視的な学習内容の変容を意識化できること

学習者の実態把握のみならず資質・能力の育成という視点を重視すると、具体的かつ可視的な学習内容がどう変わったのか、学習者自身がそれを意識化するという働きかけが必要になってくる。

これは、メタ認知などの高次の能力を育成するために不可欠である。それは、自分自身を可能な限り客観視し、これから何が自分にとって求められているのかを方向付けることにつながっているからである。このような働きかけが可能になるためには、具体的かつ可視的な学習内容を明確に示すことができる学習履歴のような評価が必要である。OPP シートに設定されているいろいろな問いは、こうした指導の機能を持つ評価を可能にし、資質・能力を育成することにつながっている。

(5) 学習や授業において簡便性と実効性があること

かつて、「目標つぶしの評価」とか「評価のための評価」などと評価が揶揄された時代があった。学習や授業が評価でがんじがらめにされていたのである。何のための評価かが問題にされ、そのころから指導と評価の一体化や形成的評価が重視されるようになってきた。このように、たとえ評価本来の機能が強調されるようになったとしても、どんな評価にも求められているのは、簡便性と実効性である。とりわけ、学習や授業を考えると、この二点は必須である。OPP シートは、この二点も十分に考慮されて開発されたものである。

2. 学習と授業における資質・能力の育成

これまで学習と授業は、教育現場で扱われている教科書の内容の理解に中心が置かれていた。その教科書の内容は、当該教科の学問体系を背景にして学習者の発達段階に即して翻案されたものとなっていた。それは必ずしも学習者の資質・能力を育成するという視点で構成されたものではない。もちろん、理科の教科書で言えば観察や実験を通して考えさせたりする場面は設定されているのだが、あくまで当該内容の理解を促進するための方法としての意味合いが強かった。

これまで教師は、学習者に教科書の内容を終えるために、またそれを理解させるために粉骨砕身の努力をしてきた。そのため、ややもすると資質・能力の育成にあてがう時間がほとんどとれなかった。つまり、現行の教科書を使って授業をどれだけ熱心に行ったとしても、授業を行う教師自身が自分なりに何か工夫を凝らさない限り資質・能力の育成は望めないのである。そこで出てくる考え方の一つが、「学習や指導の機能を持つ評価」である。言い換えると学習や授業の過程に行う評価が、それ自体、学習になり指導になるということである。

本稿で検討する OPP シートの中に「学習や指導の機能を持つ評価」機能を盛り込ませているので、具体的にどのようにすることがその機能になるのか、以下検討する。以下で検討する内容が、もし教科書を学ぶことによって身につくのであれば、わざわざ OPP シートなど使う必要はない。

3. 学習者用の OPP シートと学習や指導の機能を持つ評価と資質・能力の育成

教育評価が、教育実践において絶えず後回しにされがちなのは、学習や授業の過程に評価を位置づけるという発想がないことと、たとえそのような考えを持ったとしても具体的にどうしたらよいかわからないからである。ここで提案する OPP シートを使えば、学習や授業の過程に評価活動を自然な形で導入することができる。

(1) 学習前・後の「本質的な問い」における評価と学習および指導の機能

OPP シートの学習前・後における「本質的な問い」は、単元を貫く教師が最も押さえないことや理解してほしいことを確認するものである。それを学習前に問うことは、学習者の既存の知識や考えである素朴概念を把握し指導計画の立案を行い、学習履歴によりその変容を確認するとともに、学習後どのような科学的概念が形成されたのかを比較する問いである。問いの内容を全く同じにしてあるのは、何がどう変わったのか比較し、変容を確認する、変容を価値づけるなどの資質・能力

を育成する働きかけである。

すでに述べたように、学習者に身に付けてほしい資質・能力は、それがどのような状態にあるのかを確認し、その力をつけるための働きかけをする必要がある。学習前・後の「本質的な問い」は、まさにその働きかけなのである。

(2) 学習履歴における評価と学習および指導の機能

学習履歴として書かせる「一番大切なこと」は、まさに要点をまとめ上げる力を育成する働きかけである。言い換えると、何について学習したかを考え、重要なことを選び出し、それをまとめ表現するという、まさに「思考力・判断力・表現力」を育むための働きかけなのである。それを毎時間繰り返すことが重要なのである。

もちろん、資質・能力が最初から身についていることは、ほとんどない。それゆえ、繰り返し働きかけ、徐々に力をつけるために学習があり授業があるのである。そのため、学習者が書いた内容をそのままにしておいてはいけない。現状を少しでも改善し、資質・能力を育てるために主として以下のような二つの働きかけが必要である。

一つは、学習者が書いた内容に教師が適切なコメントを加えることである。ここで言う適切なコメントとは、学習者の最近接発達領域に働きかけることが可能になるコメントである。しかも、その内容ができるだけ短い方がよい。たとえば、「それで?」、「他には?」、「もう少し具体的に!」、「〇〇は?」などである。要するに、このコメントにより学習者が学習内容をさらに深め考えさせることができ、授業中ではできないが OPP シートで可能になる働きかけである。

二つめは、学習履歴を一、二回書いた後で「授業の一番大切なこと」の要件を考えさせる働きかけである。「授業の一番大切なこと」を表現するためには、どんな要素が必須でありそれをどのようにまとめればよいのかを学習者に考えさせ、それを使って表現してみることである。これまで、このような要件は教師が与えることが多かった。学ぶことの必然性が無ければ力はつかない。学ぶことの必然性の意識化は、資質・能力の育成のためには欠かすことができない。つまり、学習者自身が持っているレベルを超えた事を教えられてもわからないので、自ら「授業の一番大切なこと」にいかにして気づくかが重要になってくる。教師は、学習履歴を活用してその働きかけを行うのである。

上であげた二点も、これまでの教科書の内容にはないので、教師がその時間を作り出し、学習履歴として表現させた内容で実態を把握し、それに応じた働きかけを行うことが学習および指導の機能という意味に他ならない。

(3) 自己評価における評価と指導の機能

OPP シートに設定されている自己評価欄もただ単に振り返りを行わせるのではなく、重要な学習および指導の機能を持っている。OPP シートの自己評価は、学習前・後の本質的な問いに対する変容の比較、学習履歴を通した学びの足跡を振り返り、何がどう変わったのか変わらないのか、またそれについてどう思うのかなどを考えさせる働きかけを行っている。OPP シートは自己評価に必要な要素をそろえ、それを基に問いを出し、自己の現状を自覚し、学習の意味づけを行うという学習および指導の機能を持たせている。

これまで行われてきた多くの自己評価は、具体的内容や変容などが示されることなく行われることが多かった。そのため、学習者にとって何を自己評価しているかが明確になっていなかった。要するに自己評価として機能していなかったし、「学習および指導の機能を持つ評価」となり得なかった。自己評価は、資質・能力の中でも高次に位置づけられている自分の思考についての思考であるメタ認知の育成に不可欠でありながら、教育実践の場で重視されてこなかった。

このように考えてみると、これまでの自己評価は、あまりにも教師や研究者が素朴かつ表面的に扱いすぎてきたと言えるだろう。「自己評価は使いものにならない。」とか、「自己評価は当てにならない。」などという言葉をよく耳にするが、決して学習者に力がないのではない。こちらの問い方や働きかけ方が不適切であって、学習者には未開拓のメタ認知の能力が秘められているのである。そのことにわれわれは気づくべきであるし、教育現場で実践可能な研究を深めるべきであろう。

4. 教師用の OPP シートと学習および指導の機能を持つ評価と資質・能力の育成

教師用の OPP シートは、学習者の資質・能力を高める機能を持っているだけでなく教師のそれを高める役割も担っている。要するに、学習者だけが学習の修正や改善を行うだけでは不十分であり、教師の指導の修正や改善があってより効果が上がるということである。

(1) 授業前・後における本質的な問い設定の理由に関わる評価と学習および指導の機能

まず、授業前の本質的な問いはなぜ設定したのか、教師自身が明確にしておく必要があり、その回答内容を基にして授業の設計や構想を行う。授業前に学習者の実態を把握し、それも基にして授業計画を立てたりすることは研究授業でもない限り行われたい。OPP シートを使えば、それが比較的簡単にでき、学習者と教師の認識のズレを埋めることができる。これは、とりもなおさず評価を行っていることにつながっている。

授業後には、最初に考えた本質的な問いの設定理由が適切であったかどうか、学習者が書いた学習後の本質的な問いの回答内容から判断することになる。これも教師の指導に対する評価である。

(2) 指導履歴における評価と学習および指導の機能

指導履歴は、当該授業の前に学習後、学習履歴として何を書かせたいのか明確にしておく欄である。授業が終わった後、学習者の書いた学習履歴と指導履歴の間にズレがないか検討し、もし異同があれば、次の指導で修正や改善を図っていく。これも、学習履歴と指導履歴が指導の機能をもつ評価となっている事例といえよう。

(3) 授業後の自己評価における評価と学習および指導の機能

最後の授業後の教師の指導における自己評価であるが、全体を振り返って指導の適切性や効果などを評価する。これは、あくまで学習者が書いた OPP シートの内容の事実を基にして行うべきであって、イメージや主観で行ってはならない。

このように、教師用の OPP シートは、それ全体が教師の授業評価として機能しており、指導の機能を持つ評価そのものと考えることができる。

5. 学習者用と教師用 OPP シートと学習および指導の機能を持つ評価と資質・能力の育成

これまで述べてきたことから明らかなように、OPP シートは学習者用と教師用が準備され、それらに対応して学習や授業に適応されるときに最も効果を上げることができる。学習者用のそれはともかく、教師用のものは必要ないと考えられるかもしれないが、学習や授業で教師の想定外のことが起こっているのかいないのかを確認するためにも、一度使ってみたらいかがであろうか。筆者など、これまで夥しい授業を見て、見る目を養ってきたつもりだが、勉強不足と思ひ上がりのせい、未だに予想を裏切られてきている。

おわりに

ここでは、資質・能力の育成のために学習および指導の機能を持つ評価の一例をあげたに過ぎない。多くの優れた具体的方法が提案され、検証されることを願うばかりである。

もう一つ、冒頭で触れた OPPA 論の汎用性について検討することは、別の機会に譲りたい。

(註)

- 1) 堀 哲夫『教育評価の本質を問う 一枚ポートフォリオ評価 OPPA』東洋館出版社、2013.

Hori, Tetsuo, The Concept and Effectiveness of Teaching Practices Using OPPA, *Educational Studies in Japan: International Yearbook*, No.6, December, pp.47-67, 2011.

なお、OPPA 論は、すでに 2003 年に下記書物の中で始めて提案したものである。堀 哲夫『学びの意味を育てる理科の教育評価』東洋館出版社、2003.

OPPA 論に関する実践事例等については、以下の文献を参照されたい。

堀 哲夫編著『子どもの学びを育む 一枚ポートフォリオ評価』日本標準、2004.

堀 哲夫編著『子どもの成長が教師に見える 一枚ポートフォリオ評価小学校編』日本標準、2006.

堀 哲夫・進藤聡彦編著『子どもの成長が教師に見える 一枚ポートフォリオ評価中学校編』日本標準、2006.

堀 哲夫・西岡加名恵『授業と評価をデザインする 理科』日本標準、2010.

堀 哲夫・仙洞田篤男・芦澤稔也『自主学习ノートへの挑戦—自ら学ぶ力を育てるために』東洋館出版社、2014.

Koji,T.,Kanae, N. and Terumasa, I., *Curriculum, Instruction and Assessment in Japan: Beyond lesson study*, New York: ROUTLEDGE, 2017.

- 2) たとえば、下記の論文も OPPA 論を評価方法として扱っている。

松下佳代「科学教育におけるディープ・アクティブラーニング—概念変化の実践と研究に焦点をあてて—」『科学教育研究』Vol.41, No. 2, pp.77-84, 2017.

- 3) OPPA 論の教科における汎用性については下記文献で検討した。その中では、OPPA を小学校の理科、社会科、音楽科、家庭科、体育科、外国語活動の 6 教科で活用した事例をあげ検証した。

中国昭彦・堀 哲夫「OPPA の汎用性に関する研究—附属小学校校内研究の推進を中心として—」『教育実践学研究』Vol.22, pp.125-141, 2017.

- 4) 資質・能力の育成に関する評価に関しては、教育目標や内容、学習・指導方法、評価を一体的に構想するための基本原理を整理し、実践のための基礎資料を提供することを目標として国立教育政策研究所で作成された『資質・能力の包括的育成に向けた評価の在り方に関する研究』（平成 29 年 3 月）の「第 5 章 まとめと今後の課題」の中でも検討されている。「学習評価を教師の指導計画や子供の学習活動の中に明確に位置付け、教師と子供が共に取り組むことで、学びの質を高め資質・能力を育む学習評価が充実していくのではないか。その可能性を今後の研究で検証していきたい。」（同報告書、p.174）しかし、上記結論では、「資質・能力の包括的育成に向けた評価の在り方」の具体性は見えてきていない。

- 5) 堀 哲夫「教育評価のこれまでとこれから」『理科の教育』Vol.66, No.781, pp. 9-13.

- 6) ただし、京都大学教育方法学研究室を中心にして学力論、評価論研究が精力的に進められてきている。たとえば、田中耕治『教育評価』岩波書店、2008.

- 7) このことについては、すでに1) であげた書物の中でも検討した。
- 8) 石井英真『今求められる学力と学びとはーコンピテンシー・ベースのカリキュラムの光と影ー』日本標準、pp.65-68, 2015.
- 9) 上掲文献 5)
- 10) 堀 哲夫「理科の学習評価の課題ー『理解』の観点を中心にしてー」『理科の教育』Vol.39, No. 2, pp.12-15, 1990.
- 11) 上掲文献 10)
- 12) ウィギンズ, G.・マクタイ, J. (西岡加名恵訳)『理解をもたらすカリキュラム設計ー「逆向き設計」の理論と方法』日本標準、2012.
- 13) 上掲書 1)、pp. 101-118 を参照されたい。
- 14) 上掲文献 10)
- 15) 上掲文献 10)
- 16) 上掲書 1)
- 17) 上掲文献 10)